—論文—

高岡短期大学紀要　第14巻　平成12年3月
Bull. Takaoka National College, Vol.14, March 2000

「*Mason & Dixon* —— 英国植民地時代における二項対立の構図」

村　上　恭　子

(平成11年5月11日受理)

要　旨

Thomas Pynchon の最新作 *Mason & Dixon* (1997) には，作者がこれまで一貫して描いてきた西欧近代文化に見られる二項対立的な構図が踏襲されている。それは *Gravity's Rainbow* に登場する 'They' システムと 'the Counterforce' の関係が最も明確に具現しているが，本作品でも基本的には同じ構図が見られる。'They' システムを表す側は，世界覇権をかけた西欧列強の植民地帝国であり，そこで利潤を追求する資本主義企業である。これらは奴隷制という非人間的な制度を採用する一方でライン設定という人工的秩序で人々を管理・統制してきた。その理性・合理主義偏重の精神は，18世紀の支配的精神の中に見いだしうる。カウンターフォース的勢力は，体制派の権力に逆らって自由を維持しようとする様々なグループの中に見られると同時に，作品に頻出する魔法，神秘，驚異，超自然現象といったマジカル・リアリズム的要素の中に現れている。これらの非合理的，非理性的要素は，理性が支配する人間の客観的意識とは対照をなす主観的意識の営みと深く関わっており，人間の創造性や独創性や卓越性を生む大切な要素である。拙論では，これら二項対立の構図と相互関係の意味するところを考察する。

キーワード

二項対立，理性，奴隷制，ライン，非理性，マジカル・リアリズム，創造性

序

Thomas Pynchon の最新作 *Mason & Dixon* (1997)では，作者特有の二項対立的構図が踏襲されている。それは *Gravity's Rainbow* に登場する 'They' システムと 'the Counterforce' の関係に集約されるが，一方の側に西欧近代社会の産業資本主義を中心とする権力構造や理性・合理主義偏重の原理があり，他方にはそこから閉め出された一切の周縁世界が対峙されている。この構図は，モダニズム対ポストモダニズム，コロニアリズム対ポストコロニアリズム，人間の客観的意識対主観的意識といった対立とも重複している。18世紀後半を背景とする本作品では，前者を表す側は西欧列強の植民地帝国主義であり，[1] 植民地で利潤を追求する特許状会社である。これらは奴隷制という非人間的な制度を採用する一方で，ライン設定という人間や自然に対する人工的な管理・統制方法を用いてきた。その理性・合理主義偏重の精神は，18世紀に興隆した啓蒙思想や理神論の中に窺える。英国学士

産業情報学科

院とそこで働く天文学者 Masonも，客観的な科学的事実と思考を尊重しているという意味で前者に属する。他方，後者を表す周縁世界は，奴隷，被植民者，一般労働者，農奴といった差別・抑圧された弱者に，あるいは権力体制に逆らってそれぞれの自由を守ろうとするインディアンや Jacobites やアメリカ独立運動の闘志「自由の息子たち」に，さらには自然で非合理的生き方をする非西欧人の中に見られる。だが最も特異な力を発揮しているのは，作品に頻出する魔法，神秘，超自然現象といったマジカル・リアリズム的要素だ。それらは非合理的で，本能的な人間の主観的意識の営みと関わりつつ，創造性や独創性を生み出す大切な源ともなっている。もう一人の主人公 Dixon は，クエーカー教徒として平和と平等を尊重し，魔法を使い，超自然な世界を受容しているという意味で，後者に属していると考えられる。

これらの対立構図に対して，作者は後者のグループ，すなわち反権力者，反西欧・反人間中心主義者に共感を寄せる Cherrycoke 牧師を語り手に据え，解釈を加えることで反体制の色彩をこれまで以上に鮮明にしている。では，作者は牧師を通して，どのように前者のグループを見つめ，どのような解釈を与えているのであろうか，それを具体的に考察していきたい。

1．弱者の立場から眺めた西欧近代の新しい歴史像

歴史は多くの場合，種々の勢力グループの権力抗争によって作られる。各々のグループは敵対者を支配したり，根絶することを目指して闘争を繰り広げたり，自らの存続のために平和的共存や従属の道を選ぶ。複雑に絡み合う権力闘争においては，一つの勢力は支配者であると同時に，被支配者ともなりうる。作品に描かれた植民地帝国主義の時代的背景を眺めても，アメリカ植民地人はイギリスに支配されると同時に，黒人奴隷を支配し，インディアンの根絶を企て，フランスやスペインの勢力を撃退しようとしている。アメリカを支配するイギリスも，かってはローマ帝国の植民地として蹂躙された歴史を持ち，物語の中では西欧諸国，特にフランスやスペインと権力抗争を続けている。国内では Stuart 朝復興を画策するスコットランドの Jacobites を制圧し，支配下においたところだ。

このように複雑な権力抗争史においては，歴史をどのような立場から眺めるかということが重要な問題となる。牧師の歴史の見方は，従来の体制側を中心とする歴史の視点を捨て，弱者から眺めた歴史，すなわち強力で非情な権力構造に翻弄される弱者の立場から眺めた新しい歴史像を作っている。特に17世紀から始まった西欧列強の海外への勢力拡大政策は，非西欧諸国を植民地化して，西欧の諸制度を世界中に浸透させただけでなく，その過程で他の弱者の文化を押しつぶし，隷属化していった時代でもあることを，牧師は明確に示している。

例えば，1756年に起きた「カルカッタの黒穴」事件の作品での捉え方を見てみよう。この事件は，イギリスがインドを完全な支配下に置く発端となった事件と一般に解釈されている。広大で肥沃な Bengal 州の領土をもつ領主はフランス人にそそのかされ，イギリス企業がインド交易で得ている巨富を独占しようと企てた。そして領主軍は，植民者イギリス人をカルカッタの William 砦にある「黒穴」と呼ばれる独房に閉じこめたのである。この時，「黒穴」に入れられた150人のイギリス人は，インドの夏の酷暑の中，喉の渇きで気が狂い，互いに踏みにじり合って，朝までに127名が死亡したと言われる。しかし作品では，犠牲者はイギリス植民者からアフリカ人奴隷に置き換えられ，権力者同士の抗争から被植民者・奴隷に対する植民者の非人間的扱

いという状況に変えて再現されている。第14章におけるオランダ植民地ケイプタウンにある白人向け売春宿の奥にあると噂される'Black Hole'の話しがそれである。William 砦にある「黒穴」を四分の一に縮めたレプリカの中には，裸の黒人奴隷が客と共に押し込められ，「黒穴」の事件の死の恐怖を，迫真的に，そしてエロティックに味わおうとする白人の望みを叶えるために，奉仕させられているのだ。牧師にとって，どこの場所であれ本当の犠牲者とは，非植民者であると同時に弱者の一般人なのである。

あるいは，第31章のアメリカ植民者とインディアンとの紛争の描き方を眺めてみよう。フレンチ・インディアン戦争が全面的に終結した1763年にフィラデルフィアの町に入ったメーソンたちは，やがてアメリカ到着以来初めて人間の残虐行為を目にするが，それは白人がインディアンに対して行なったものであった。Lancaster において Paxton Boys と称される地元民兵が，刑務所に避難し保護されていた26 名のインディアンを虐殺したのである。Paxton Boysはその先々週にも Conestoga でインディアンを殺害している。殺されたインディアンは老人，子供，無防備な酔っ払いであり，Moravia 教団によりキリスト教に改宗して友好的に暮らしていた人々であった。メーソンとディクソンは虐殺跡を訪れ，弾痕やこびりついた血痕に深い衝撃を受けた。「Cape での冷酷な犯罪行為－公開死刑執行，むち打ち，引き裂かれた肉，噴出する血，自己満足に浸る肥満した白人たち」[2] よりも遥かに邪悪なことがここでは行なわれているのだ。

アメリカ史では，インディアンの勢力はフレンチ・インディアン戦争での敗北（アメリカ国内では1760年に終結）によって決定的に弱体化したとされている。それまでのインディアンは北米大陸におけるフランスとイギリスの覇権争いを利用し，中立の立場をとることで漁夫の利を得ていた。しかしフランスの敗北と共に，フランスと手を組んだインディアンだけではなく，それ以外の諸部族に対してもイギリスは強硬な政策に転換した。取り引き商品の価格を引き上げ，要塞使用料の支払慣行を止めるだけでなく，インディアンの生活領域への開拓者の進出を許したのである。それに対抗してインディアン側は，Ottawa 族の首長 Pontiac をリーダーとして，強者イギリスへの全面的従属を逃れるため，インディアン諸部族による同盟を作り，1763年から1766年の間に各地で蜂起した。作品の背景となるのは，この Pontiac の反乱に対する白人側の報復戦である。バージニアとペンシルバニアの辺境部では少なくとも2000人の白人犠牲者が出ていたからだ。Paxton Boys と呼ばれるスコットランド系アイルランド人の辺境開拓者は，インディアンへ報復を加える一方で，彼らの襲撃に対しての軍事的保護を求めてフィラデルフィアへの行進を行ない，一切の暴力沙汰を起こすことなく法に則り保護要請を行なっている。このように史実を見る限りでは，白人とインディアンのどちら側がより残虐非道であるか明言できない勢力抗争が繰り広げられている。当時アメリカ北東部のインディアンは複雑な部族抗争を繰り返しており，フレンチ・インディアン戦争時，イギリス側についた Iroquois 族にしても，以前は近隣の諸部族と戦い，彼らを制圧してきた。また Iroquois 族もフランス側に組みした Huron 族も，元は南方から侵入してきた部族で，先住民の Algonquian と総称される諸民族を撃退して北東部に住み着いたのである。インディアンのやり方には宗教的な意味の裏付けがあったにしろ，敵の頭皮を剥いだり，火あぶりで一昼夜以上もかけてじわりじわりと殺すといった残虐な奇習が見られた。[3]

しかし牧師の語りには，このようなインディアンの負の要素は説明されていない。メー

ソンはインディアン虐殺跡で，飲むと全てを忘れるという「レーテーの水」の味と臭いを感じ，アメリカでは「時間が地獄の周囲を流れる本物の（忘却の）川 (346)」だという思いに捕らわれた。この「レーテーの水」に表される忘却とは，当時のことだけでなく，インディアンがその後に辿った運命，すなわち白人との戦闘に敗れ，各地で結ばれた条約も一方的に反故にされ，保留地の貧しい環境に押し込められ，差別され，民族的伝統も犯され続けて現代にまで至った，その被植民者・弱者としてのインディアンの歴史を忘れているかに見える現在の白人に対する作者の思いが語り手を通して表現されていると解釈できるのだ。牧師と聞き手 Ives は，英国軍が天然痘をインディアンに故意に感染させていたことや，平和主義的信条で知られているクェーカー教徒ですら，インディアンに銃器を売って利益を得ていたこと（その中には射手にも危害を与える欠陥銃器も含まれていた）を補足して，「当時，罪を免れていた者は一人もいなかった (308)」と，植民者・白人の罪を強調しているのである。

さらには，作品で言及される Jacobites の反乱 (1745)も，本質的には王位継承を巡る覇権戦争と考えられる。すなわち Stuart 家 James 二世の孫, Charles Edward がスコットランドの高地人氏族を味方に引き入れ，Hanover王朝の転覆を企てた戦いなのである。敗れたジャコバイトの多くの高位者は絞首刑にされたり，私権を剥奪された。私有地は奪われ，族長による世襲裁判権は王権に移された。しかしメーソンとディクソンは「あの夏，17才だった者は誰もがジャコバイトだった (312)」という心情的共感に最終的に到達している。ジャコバイトに共感を寄せるのは，ディクソンのようなスコットランドの血を引く者だけでなく，イングランド人であるメーソンとて同じである。被支配者となったスコットランド兵は，武器の所有だけでなく，民族特有のタータンチェックのスカートをはいたり，風笛を吹くことも禁じられた。イングランド兵はスコットランドで略奪の限りをつくし，怯えた村々は強者の前に服従せざるをえなくなったのである。

また，1756年の Stroud の町の織工ストライキの話しでは，鎮圧を指揮した James Wolfe とその連隊は，権力者側の冷酷非情な力を表す抑圧者としての役割しか与えられていない。6名の歩兵を従え，羊がのどかに草をはむストラウドの町に突然現れたウルフは，「慣れ親しんだ田舎のリズムを軍隊時間の統制的鼓動に変え，すべてを軍隊の意向やスケジュールに合わせるように告げた。(501)」駐屯の目的は賃金を半分に減額された織工のストライキの鎮圧にあったが，そのやり方は秩序ある規律とは程遠いもので，羊を標的に気まぐれに銃を撃ち，市民を打擲した。こうした作中のウルフの姿に対し，史実に描かれた現実のウルフは繊細な詩人肌の男のように見える。ウルフは1759年にフレンチ・インディアン戦争に従軍し，St. Lawrence 川流域での対フランス戦を指揮して殉死した英雄である。ウルフに関する J.R.Green の記述を見ると，ぎこちない態度や時折吐く大言壮語の裏に，優しさと勇敢さが隠れている英雄的気質の持ち主のように描かれている。[4] 難攻不落の長い絶壁地帯に立てこもる敵をおびき出せず，6週間にも及ぶ膠着状態の後，意を決して突破口を開いた時，ウルフは Thomas Gray の "Elegy Written in a Country Churchyard" を吟唱し，「ケベックを占領するより，この詩の作者になりたかった」とつぶやいたと言われている。このように作中のウルフ像と史実の像を変えたのは，軍隊の本質を示す狙いがあったことは明白である。メーソンは，ウルフがストラウドの織工に示した態度に徹底した軽蔑の念を読みとり，同じ軍人である Braddock 将軍のインディアンに対する態度との類似性を指摘している。ブラ

ドックもこの前年，1755年に Duquesne 要塞をインディアンに急襲された際，負傷し，それが原因でウルフと同様に死亡している。ブラドックはインディアンを「待ち伏せが得意で，礼節を知らない，反逆的で危険な原住民(501)」と見なしたが，これは織工に対するウルフの見方と同じである。牧師はストラウドの事件にコメントを加え，軍隊は自由や忍耐というまことしやかな理由を掲げておきながら，同国人である一般大衆に対しては外国からの侵略者のごとく，疑いと軽蔑の念で接していると評している (408)。メーソンの故郷ストラウドでの織工のストライキやディクソンの故郷 Durham での炭鉱夫のストライキに代表される資本家と労働者の階級闘争においても，インディアンと植民者との闘争においても，共に鎮圧にあたった軍隊は権力者側の武力を行使する人間として，抽象的な役割しか与えられていないのである。

以上にように，様々な対立の構図――＜植民者，特許状会社――被植民者・奴隷，インディアン＞，＜資本主義企業（＝イギリス政府）――賃金労働者＞，＜領主――農奴＞を通して牧師が語っているのは，一方的に抑圧されるに到った弱者の歴史なのである。

2．西欧近代社会制度への批判

作品に描かれた18世紀の歴史は，牧師によって新しい視点から見直されると同時に，西欧近代の社会制度に疑問を投げかける形で展開されている。社会学者 Anthony Giddens によると，西欧近代の制度には以下のような四つの特性が見られる。[5)]

まず作品導入部で語られた，牧師の若い頃の監獄に投獄された体験では，第一の「監視」(情報の管理と社会的監視）する体制への批判となっている。牧師は権力者側が一般庶民に対して犯した罪を告発する文書を匿名で公にしたことで，投獄されたのである。その内

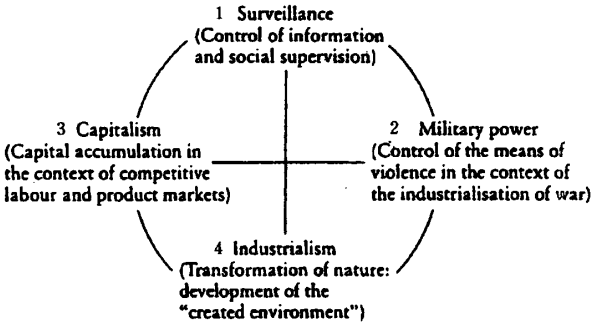

Figure 1. The institutional dimensions of modernity.

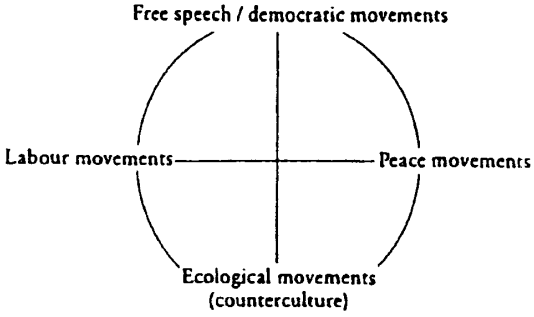

Figure 4. Types of social movements. (159)

容は「自分の目に触れたある種の罪――囲い込み，追い立て，巡回裁判評決，軍隊生活の形で強者が弱者に犯した罪 (9)」についてである。牧師の罪名は匿名の罪とされていた。この時，気が狂う程の衝撃を彼が感じたのは，言論の自由や民主化を求める個人を名前によって監視・制御する体制の実体を彼が知ったことによる。今まで自分のものと思っていた個人の名前とは，実は当局の所有物であり，獣につける首輪のように個人を拘束し，意のままに操るための道具だったことを悟ったことによるのだ。

第二の「軍事力」(戦争の産業化という状況のもとでの暴力手段の管理）の特性は，イギリス船 Seahorse 号がフランス軍艦に砲撃された事件を通して批判されている。金星通過の天体観測のためにスマトラへ向かったメーソンとディクソンは，たまたま牧師と共に Seahorse 号に乗船していて，この事件に遭遇したのだが，命の危険に晒され，恐怖を感じても，逃れることもできない自分たちの状況を意識するばかりであった。このように，

強力な軍事力は一般市民を犠牲にする形で悲惨な戦争を引き起こしているのである。既に述べたように，ストラウドの織工のストに代表される労働争議でも，インディアンと植民者との戦いでも，鎮圧に当たった軍隊は冷酷な侵略者の側面を見せているのである。

第三の「資本主義」(競争的な労働市場や生産市場を背景とする資本の蓄積）という特徴では，植民地帝国主義の時代を反映して，奴隷制が大きくクローズアップされている。メーソンたちが行く先々，希望峰，セントヘレナ島，アメリカ，North Cape と全ての土地は，奴隷制という非人間的制度で蹂躙されていた。奴隷制における労働の搾取という点では，ストラウドの織工やダーラムの炭鉱鉱夫の労働争議も同じ根をもっていると言える。

第四の「産業主義」(自然界の変容—創造された環境の発達）という点に関して見れば，作品に描かれた様々なラインがこの問題の本質を表していると考えられる。ラインは，利権のために自然を分割して支配するために作られる人工物だからである。新大陸アメリカにおいても，自然は植民地化されると同時に，測量され，ラインが引かれて，利潤追求に都合が良いような優先権や制御権が確立されている。[6] こうして大自然は，ラインを通して権力側の秩序構造に取り込まれていくのだが，その際，利潤を追求する企業が必ず介入する。「市場はあらゆる囲いのない土地に慣例法をもって出現し，権力はラインと標尺で体制を整えていくのだ。(281)」

ラインがはらむ問題は，メーソンとディクソンが測量したアメリカの植民地ペンシルバニアとメアリーランドの境界線を示す 'the Visto' に象徴的に示されている。'the Visto' は，木々を伐採し，自然を破壊し，地形を無視して作られた人工的な道であり，インディアンが自然と共存する中で，自然にできた踏み分け道「偉大なる戦士の道」とは対照をなす。「川に接する時のように，この小道に接する (646)」インディアンにとって，「この小道をメーソンたちの 'the Visto' が（交錯して）切断することは，川に土のダムを作るようなもの (647)」なのである。ラインに表される西洋的な自然の制御方法に対して，東洋的価値を尊重する中国人風水占い師 Zhang は，「荒廃の大通り (679)」，「悪の暗渠 (701)」と称して，厳しく断罪している。東洋的観点から眺めると，「境界とは海岸線や尾根，川の土手といった自然に従うもの (542)」であり，西洋的な意味の「正しい line」は，自然の各々の方位を支配している動物をも傷つける行為なのである。また，ラインにより分割された世界は，原初の全一的な世界を分断し，それと同時に人間の他者との連帯感を失わせ，差別を産む元凶にもなっている。イエズス会神父 the Wolf of Jesus は，愛や信頼，同意が得られない世界を制御する手段として「壁」というラインが作られたが，それは世界の投獄化である，と語っている。

The Model,...is Imprisonment. Walls are to be the Future....Faith is no longer willingly bestow'd upon Authority, either religious or secular. What Pity. If we may not have Love, we will accept Consent, —if we may not obtain consent, we will build Walls. As a Wall, projected upon the Earth's Surface, becomes a right Line,...we may shape, with arrangements of such Lines,...Rules of Precedence, Routes of Approach, Lines of Sight, Flows of Power,.... (522)

事実，'Mason & Dixon Line' によって分断されたアメリカ国民は，後に国を二分する南北戦争という内戦を引き起こすことになるのである。さらに優先権のルールや制御ルートがラインに従って確立された時，アメリカという新大陸の楽園は，無限の可能性を制御され，有限化されてしまうのだ。

...Earthly Paradise, Fountain of Youth,...safe till

the next Territory to the West be seen and recorded, measur'd and tied in, back into the Net-Work of Points already known,...changing all from subjunctive to declarative, reducing Possibilities to Simplicities that serve the ends of Governments, —...assuming them unto the bare mortal World that is our home, and our Despair. (345)

こうした意味で，ラインは西欧近代を待たずとも，人類の歴史の誕生と共に始まった現象と言えるかもしれない。少なくとも作者は，文明社会を築く上で不可欠の要素と考えていたようである。聖書の創世記でも，天地創造の二日目に神は天空と上下の水を分割し，「最初の境界線を作り，その後の歴史のすべては，さらなる分割に過ぎなかった (361)」と登場人物の一人は語っている。ラインは境界線となって，事物を識別させる機能も果たすが，権力も作動させるという諸刃の剣の作用をするのだ。そうした権力構造と深く結びつくラインの性質を本能的に感じるからこそ，メーソンたちは境界線測量の仕事の正当性に疑問を投げかけているのである。

He has certainly, and more than once, too, dreamt himself upon a dark Mission whose details he can never quite remember, feeling in the grip of Forces no one will tell him of, serving Interests invisible.... his Sin is not to 've refus' d the Work from the outset. (394)

作中に描かれた別のラインも権力と関係している。ディクソンがダーラムで測量士として携わっていた「囲い込み」のラインもそうだ。英国における囲い込み運動は，16世紀の毛織物の興隆と共に始まり，作品の背景となる18世紀後半では議会公認の議会制囲い込みで耕地の半分以上がすでに囲い込まれており，19世紀には開放耕地はごくまれになってしまったといわれる。囲い込みにより，貧農は薪を採ったり，家畜を放牧できる共有地を失い，農業を捨てて，資本主義を支える賃金労働者にならざるをえなくなっていくのである。

ラインは空間ばかりでなく，時間にも存在する。1752年に英国で実施されたカレンダー改正では，日付は9月2日からいきなり9月14日に飛ばされ，権力者である政府の一方的な時間への介入と操作を国民全体が意識した事件であった。ヨーロッパ諸国と共通のカレンダーを採用する必要から，それまでのユリウス暦からグレゴリオ暦に改訂されたのだが，人々は「議会が制定した時計の同じ一振りにより，比類ない侮辱を受け，暦の傷を背負い続けることになった (555)」と牧師は述懐している。強制的に奪われた11日間は「人生という織物に走る裂け目」となり，人々に心の傷を残した。メーソンも例外ではない。牧師は二人の *Field Journal* の記述の中に，11日おきの周期をもって，時計の振り子のように測量の場所を移動するパターンが繰り返し現れていることを発見している。失われた11日間が二人の深層心理に与えた影響をそこに読みとることができるのだ。時間においても，空間と同様，継ぎ目ない自然な流れを理想とする東洋的思想が対峙されている。荷物として船上に乗せられた Shelton 時計と Ellicott 時計は，大海原の自然な鼓動を感じて「自分の振り子の長さや，一日の分割に関わりなく，多少の抵抗をしても波の鼓動に合わせて時を刻みたいという誘惑 (123)」を感じている。また，カレンダー改正と係わる Macclesfield 伯も，西欧的時間の概念を尊守しながら，それとは対立する時間への接し方の必要性を感じている。彼が雇った東洋人の存在がそれを暗示している。その東洋人は「西洋人のように時間の経過に対して恐怖心を抱かず，むしろ時間に無関心で，できるだけ純粋に透明に時間に接している。(195)」そうした意識を反映するように，彼らが使う言葉には，動詞の時制がなく，時間の制約から解放されているのである。

メーソンたちが作ったラインは，ペンシルバニアとメリーランド両植民地の82年にも及ぶ境界線紛争を解決したという点では一見，正の作用をなしているかに見える。[7] だが先述したように，二人が作ったラインは，奴隷制を敷く植民地と賃金労働制をとる植民地の間に境界線を引いた。Cape, セントヘレナ,アメリカと二人が行く先々のすべてにあった奴隷制，この奴隷制を容認する地域を作るラインを二人は引きながら，「この公の秘密，この恥ずべき核がどこか他の場所にあるかのようなふりをして (692)」きたのだ。4年10カ月に及ぶライン測量の終了間際に，Baltimoreの町で奴隷監督が奴隷たちを鞭打つ光景を目にした時，ディクソンは鞭と奴隷の間に立ちはだかり，鞭を奪って奴隷監督を打擲し，奴隷を解放した。平和主義のクェーカー教徒であるディクソンにとっても，奴隷監督の残忍さは容認できなかったのだ。この場面は，ディクソンのこれまでの体験に対する最終的な意志表示と解釈できる。他方，同じ場にいたメーソンはディクソンの勇敢な行為を賞賛しながらも，傍観者の立場を保持した。この事件に関して，牧師は次のように述べている。

Here in Maryland, they had a choice at last, and Dixon chose to act, and Mason not to,- unless he had to, —— what each of us wishes he might have the unthinking Grace to do, yet fails to do. To act for all those of us who have so failed.（下線は筆者による） (698)

ディクソンは「行動する」ことを選んだが，メーソンはそうしなかった。ここで注意したいのは，事件を語る牧師は「私たち」という代名詞を使用することで，メーソンだけでなく,語り手自身や聞き手のLeSpark家の人々，さらには読み手の読者をも巻き込む形で，傍観する怠惰を戒めていることである。そこには，行動することを望み，あるいはするだけの雅量がありながら，行動しないこうした人々の存在こそが権力の支配を許す元凶になっているというピンチョン自身の考えが窺えるのである。ピンチョンは“Nearer, My Couch, to Thee”(1993)と題するエッセーで，七つの大罪の一つ，「怠惰 (Sloth)」の現代型の最初のものとして，Melvilleの短編“Bartleby the Scrivener: A Story of Wall-Street”(1853)の主人公Bartlebyを挙げている。[8] バートルビーは“I would prefer not to”と言って，一切の行動をしないことで，悪の世界への協力を拒んだ。しかし，ピンチョンにとって，それは怠惰な罪に当たるのである。傍観する怠惰の罪こそが，1920年代，30年代の世界的なファシストの台頭やヴェトナム戦争を許した。現代型の怠惰とは，正しいことを選ぶ機会が与えられながら，やるべきことを怠ることを指す。怠惰によって道徳的な苦悶を感じないわけではないが，絶望的な苦しみを味わうまでには至らない人々が現代では多数派を占めているのである。かつて織工ストライキを無力なまま傍観し，妻の親族や父の助けになれず，故郷ストラウドを逃げ去ったメーソンは，再び奴隷問題で逃げたのである。奴隷制に象徴される人間への差別と抑圧の状況は，メーソンやディクソンや牧師たちが生きた時代から今日まで，アメリカでは解消されることなく続いている。

When the Hook of Night is well set,...slowly into the Room begin to walk the black servants, the Indian poor, the Irish runaways, the Chinese Sailors, the overflow'd from the mad Hospital, all unchosen Philadelphia, ...They bring their Scars, their Pox-pitted Cheeks, their Burdens and Losses, their feverish Eyes, their proud fellowship in a Mobility that is to be, whose shape none inside this House may know. (759)

夜，皆が寝静まった時に，LeSpark家にどこからともなくわき出た人々ー黒人召使い，貧しいインディアン，アイルランド人逃亡者，中国人水夫，精神病院からあふれでた狂人ー

は，時を経てやがて*Crying of Lot* 49 の舞台，サンフランシスコの夜の町にうごめく差別された WASTE の人々となり，あるいはロスアンジェルスの貧民街 Watts に生活する「貧乏人，敗北者，犯罪者，自暴自棄の人々」[9] となるのである。

3．西欧近代の理性・合理主義偏重の原理への批判

西欧近代の社会制度は，牧師によって反西欧的視座から批判されていた。しかも，彼の批判の対象は制度だけに留まらず，その根底に流れる理性・合理主義偏重の原理にまで及んでいる。背景となる18世紀は，理性の時代，啓蒙主義の時代として知られているが，こうした精神を具現する英国学士院，産業革命，百科全書派の啓蒙思想，理神論といった事柄が作品では言及されている。

1662年に正式に発足したイギリス学士院は，現象の観察と実験という近代的自然科学の研究方法を用い，数々の科学上の発見の時代を開いた。以来，本作品の背景となる1700年中頃までに，学士院は天文学を初め，気学，医学，生理学，鉱物学，鳥学，植物学などの諸分野に飛躍的な進歩をもたらしたのである。また，Arnold Toynbee はヨーロッパ産業革命の始まりを *M & D* の背景と同じ1760年前後としているが，産業革命の発展も，合理的精神と客観的な科学の発達が産み出したものである。さらに，啓蒙主義の思想も，人間悟性に全幅の信頼を寄せる合理主義の精神に貫かれている。その知的系譜は1751年から1772年にかけてフランスで完成された，本文17巻，図版11巻からなる百科全書に端的に表れていると言われる。その基本的立場は合理主義であり，筆者たちは古い権威や信仰から人間精神を独立させることを目指した。宗教界では，この時代に理神論が台頭してきた。理神論では，理論から割り出した神は認めるが，神秘性，超自然的啓示，奇跡といった非合理的要素や信仰箇条は否定する合理主義的世界像を求めたのである。

こうした18世紀の支配的精神が，大きな存在感を作品に与えている。だが，それとは対照をなす非合理的，非理性的要素は，もっと大きな存在となっているように思われる。作品の語り手は超自然性を本質とする宗教に仕える牧師に設定されており，彼が語る時は，神の子キリストの誕生を祝うクリスマスになっている。また，彼の立場を補強するかのごとく，物語の冒頭と末尾には話しをする超自然的な犬，'The Learnèd English Dog' が登場して，牧師と同種のフレームの効果を与えている。それだけでなく，作品には作者特有の非合理的エピソードが溢れている。蛇も時計もゴーレムも犬と同様に話しをする。対スペイン戦からオーストリア継承戦争への長期戦争の端を開いた「Jenkin の耳」事件の切り取られた耳は，瓶の中から起きあがると，客の言葉に聞き入る。巨大な電気ナマズ Felipe は，強力な電気を発し「奇妙に恵み深く賢い(434)」表情で人間におじぎをする。[10] 他にも重さ4トン，高さ10フィートもの巨大なグロスターチーズ，教会の尖塔よりも背が高い超巨大な野菜，死者の亡霊，自己複雑化の能力をもつ機械の鴨，極北の地下世界にある別な文化社会，あるいはまた，魔術師，風水師，占星術，様々な神秘思想といった事柄が作品に描かれている。ディクソンも空中浮遊術を使い，魔法を信奉していた。

このように作品内では数々の超自然的要素が科学的，客観的事実と共存しており，不思議な世界を醸し出している。エッセー "Is it O.K. to Be a Luddite?"の中で，ピンチョンは「理性の時代」と呼ばれた18世紀にゴシック小説が流行した理由として，神秘性への人々の要求をあげている。「奇跡の時代として知られるようになった初期の神秘的な時代に対する深い宗教的な憧れ」[11] が人々の心の中に

あるのだ。18世紀以前，特に中世の頃には，自然の法則はそれ程厳密に理解されておらず，巨人やドラゴンが生息し，魔術は単なる機械装置に化してはいなかった。*M & D* の中でも，同様の思いが繰り返し語られている。...inhabit a part of England where ancient creatures may yet move in the Dusk, and the animals fly, and the dead pop in now and then for coffee and a chat. Upon my home soil, the Ground for growing any such Wonders has been cruelly poison'd with the coming of the hydraulick Looms and the appearance of new sorts of wealthy individual, the late-come rulers.... (313)
水力紡績機に代表される新しいテクノロジーと資本家階級の出現が神秘的な要素を破壊したとする上述の主旨は，"Is it O.K. to Be a Luddite?" の主張と同じものである。この時代にアメリカでは，イルミナチ，フリーメースン，'Elect Cohens' 等の様々な秘密結社が誕生したことを牧師は語っているが，やはり神秘を求める人々の要求を反映しているのだ。

Keith Thomas によると，科学技術の発達と秩序ある合理的宇宙観の台頭を背景に，イギリスでは17世紀末までに宗教と魔術は衰退している。だが，その因果関係は単純なものではなく，今日でも神秘的治療，中国の易占い，占星術，数々のオカルトや心霊主義が流行しており，「人口のほぼ四分の一は……魔術師と呼ぶのにきわめてふさわしい宇宙観をもっている」と最近の調査報告をあげている。[12] 人類学者 Bronislaw Malinowski の論によると，魔術は「人間が埋めることのできない割れ目，つまり自らの知，ないし現実的抑制の能力の隙間に出会い，それでもその追求を止めることができない場合，必ず起こると期待しうるものであり，そして一般に見つかるもの」[13] である。これらの論からも推察できるように，超自然的な要素は時代に関わりなく人間の心に存在するものなのだ。

ピンチョン作品では，これまでにも60年代のカウンターカルチャーに見られるエマソン，ソーローらのトランセンデンタリズムや東洋的神秘思想が重要な価値として提示されていた。またユングが説く主観的直感力や無意識も大切な要素となっている。ユングは，人間精神の営みを，理性が働く客観的意識と，感情，直感が働く主観的意識の二面に分けたが，このどちらか一方を切り捨てることはできない。例えば，人は死に遭遇した時，死が変身，無化，自然の掟であるといった客観的認識に至る。しかし，主観的意識はそこから衝撃や恐怖，苦悩や不安を抱き，降霊術や神話等によって死の現象を拒否，ないし忌避しようとする。そこには客観的な死の認識と，それを信じることができない主観的な意識の両方が，他者を本当に無効にしない曖昧な関係で両立している。人間の意識とはこうした二つの意識の混乱した合体なのである。科学がどのように発達し，真理が発見されようと，一人一人の個人にとっては自然界には謎や未知のもの，驚異や神秘が溢れている。この不確かな割れ目を補うため，主観的意識は幻想を作り，宗教や神話や魔術を生み出し，常軌を逸脱していく。Edgar Morin が言うように，人間は客観的意識が働く理性の人（賢人）であると同時に，主観的意識が働く錯乱の人（狂人）なのである。[4]

科学界に偉大な発見をもたらしたコペルニクス，ケプラー，ニュートンは占星術を信奉し，少なくとも一つの魔術秘密結社のメンバーであったという。メーソンと深い関係にあった英国天文台長の Maskelyne も，セント・ヘレナ島にいた時代に「危険な程，狂気の人(128)」であったと牧師は語っている。マスキリンにとって，セント・ヘレナ島は「意識をもつ生き物で，地下から生まれる力によって生命を吹き込まれている。(128)」島の活火山が噴き出すガスとあたり一面の地

獄のような光景も，彼にとってみれば「執拗な幽霊，大昔の罪 (132)」が取りついている証拠なのである。あるいは理性的に行動するメーソンたちにも錯乱の人の面が見られる。ライン測量のため原始林の奥深くに入って行った時，「だめだ……これ以上だめだ……これ以上入ってはだめだ (634)」，「おまえたちは西端の道標を超えて奥深くに入り過ぎている (635)」とささやく声が二人には聞こえ，風の音だと反論してもどうしようもなくなるのである。ケプラーは「占星術（astrology）は，天文学（astronomy ）の理不尽な姉 (136)」と称したそうだが，理性と非理性は本来兄弟関係にあり，密接に関わっている。しかし，西欧社会はいつのまにか理性のみを偏重し，非理性を排撃，抑圧するようになってしまったのである。

この意味で，牧師がしばしば紹介する反西欧的視座，特に主観的意識と客観的意識の区別がない両者が一体化した世界観や狂気に価値を置く考え方は，西欧文化の規範に再考を促す作用をしている。例えば，悪夢に悩まされているメーソンの精神治療者として紹介された男は Malay の Negrito 族だが，「Negrito 族の信念には，夢の中の世界と目覚めている時の世界は同じように現実のものだ (70)」という考えがある。あるいはインディアンには，自然と人間，あるいは自然と超自然との明確な峻別意識は存在しない。人間は自然の一部であり，人間にも，動植物にも，山や川，空や大地の無機物にも超自然が宿ると考えているのである。だから人間が動物に変身したり，逆に動物が人間に変身するのはごく自然なこととされていたのである。西の地平線上に住むとインディアンが信じている神は，人間と同じく，文字通り具体的な肉体を備えた存在なのだ。測量のために星を観測するメーソンら白人には，一方的に星を見る意識しかないが，インディアンが星を眺める時，星の方からも人間を注視しているという考えがある。いわば人と星は，釣り人と魚と同じ関係にあり，星を見つめることは 'Sky-fishing (651)' に相当するのだ。またインディアンは「狂気を敬う。彼らにとって狂気は聖なる状態なのである。(674)」日本の禅宗でも，「公案を前にして修業者が瞑想をする時，聖なる狂気の状態にまで至ることが必要とされている。(22)」逆説的な公案が教える矛盾し合う対立概念が統一された世界とは，非合理的な，その意味では狂気の世界なのである。ところが，西欧社会は狂気を抑圧する。オランダの植民地となっていたケイプタウンでは「素直な妄想患者から人殺しでもしそうな凶悪な者まで，人種，状態，病気の程度に関わりなく，あらゆる狂人 (152)」が奴隷小屋の中に閉じ込められていたことを牧師は語っている。フーコーは『狂気の歴史』の中で，西欧近代社会が狂人を一般社会から隔離した過程を描いたが，こうした精神は植民地帝国主義の時代に全世界に波及していき，反西欧的なものを封じ込めたのである。牧師は若い頃の投獄体験を通して西欧システムの真実を知った時，「狂気に陥った (10)」が，狂気とは，こうした意味において西欧社会の規範を逸脱する理念を表していると解釈できるのである。

主観的意識が客観的現実のあらゆる制約を越えてはばたく常軌逸脱や錯誤，無秩序な彷徨や空想の産物は，創造性や独創性，卓越性を産み出す。[15] 逸脱は革新とさらなる豊穣を産み出すために必要な過程なのである。だから社会の根本的な変革が生ずる時代には，いつでもヘルメス＝メルクリウス的元型が形作られ，トリックスター的現象が見られるのだ。中国人風水師 Zhang は，人間の理性と秩序による統制が及ばない自然，即ち「森は暗黒のエイジェントではない (615)」，森こそ人間を真に啓発するものであると述べている。アダムとイブは森の木の実を食べて知恵を獲得し，木の下でブッダは悟りを開き，ニュートンは万有引力を発見したことは，Zhang に大

きな示唆を与えているのだ。

他方，主観的想像力は，牧師の語りの中で社会に対する独創的なユートピア像として結実している。主観的想像力は，非合理的であるが故に，理性が理解する現実原則から解放され，現実を魔術的，ユートピア的に変形する可能性をもつからだ。N.フライは，ロマンスの形式に日常的世界を変形することをめざす願望充足，ないしはユートピア的幻想を認めているが，本作品に見られる超自然的要素にも同様の機能が見られるのだ。[16] 科学者 Jacques de Vaucanson が作った機械の鴨は，その好例である。この鴨は機械でありながら，消化，排泄だけでなく，人間と言葉による意志疎通ができ，無生物の世界から脱している。だが何より驚くべきことは，この鴨は生殖機能こそ備えていないものの，有機的生物大系と同じように外部の無秩序な情報や雑音を取り込み，錯誤の過程を経ながらも，そこから新しい創造を組織化する自動生産体系 (autopoiesis) をもっていることだ。そのため，鴨は登場するたびに新しい能力を開発している。飛ぶ速度に磨きをかけ，やがては超高速で姿を消して飛ぶ能力や壁を自在にすり抜ける技術，インディアンの大群を総崩れにさせ，山を平らにし，郡一体の土地を半日で耕してしまう技など，数々の超能力を鴨を示している。鴨のずば抜けたスケールの能力は，人々の夢や願望であり，この意味で鴨はスーパー・ヒーローと言える。鴨に見られる強力な攻撃力と野蛮な攻撃本能には，核による人類破滅の脅威を抱えるまでに到った科学の発達と，それを制御する人間の原始的攻撃性に警鐘を鳴らす寓話のようにも見える。しかし機械の鴨は，人間の食べ物として犠牲となり続けてきた弱者としての鴨の側に立ち，人間への怒りと復讐心を抱いている点で，作者がこれまで描いてきたカウンターフォースの特徴を備えている。そして機械の鴨が柔軟に関心を変え，生命特有の「自己複雑化 (373)」の能力を示している姿には，固定した規範に縛られた西欧近代に戦いを挑むカウンターフォースの夢が託されていると解釈できるのである。

Ulster での金星通過観測の際に，ディクソンが行ったと主張する極北の地下世界の不思議な話も，奇想天外な理想郷を示している。大地の奥深くにある空間には，異常に大きな目をした人間（？）がコウモリのように逆さになって「地球の内側の表面 (739)」を歩き回っている。当然，彼らの生活は地上の人間とは異なっている。だが非常に重要な違いは，凹面状をなす地球の内側の表面では「皆が他の皆の方を向いている――皆の主軸が一点に集まっている，――だから少なくとも互いの存在を認めさせられ――行動規範に関する全く異なる一連の規則ができている (741)」ことだ。それに対して，丸い地球の凸面状の大地の上にいる人間は皆，別方向を向き，その主軸は収斂することがない。そのため，他人への配慮を欠き，その結果，人間性無視と差別が蔓延するようになったと批判されているのである。

4．西欧近代の人間が辿る宿命

天文学者メーソンは，科学的論理に反する事柄が信じられず，「神がたびたび顕現すること (747)」を好まない典型的な理性の人として語られている。作品でしばしば言及される，時代の観測機材を駆使したメーソンらのライン測量方法は，正確で客観的な科学的アプローチの仕方を読者に実感させる。しかし，金星通過観測の際にメーソンらが陥った「茫然自失」と「魂の転換 (100)」の状態が宗教における恩寵の顕現の体験と同質なものとしてディクソンには理解されたように，純粋に科学的な観測でも神秘的な要素が伴われている。メーソンにとって，理性の理解を越えた非合理的要素は，亡き妻 Rebekah の亡霊に

象徴的に表されていると考えられる。レベッカは西欧社会によってまだ完全に征服されず，自然の神秘が息づいているセントヘレナ島やアメリカの大自然を背景として，亡霊となって現れると「人が推測すらできない地球の秘密 (172)」を語り，「ある時点を越えると思考がほとんど役立たない (409)」ことを告げて，理性と知の限界を彼に教えたのである。彼にとって彼女の霊を否定することは，キリスト教を否定することにも繋がる。なぜなら「コリント人への第一の手紙」第15章に「もし死人の復活がないならばキリストもよみがえらなかったであろう」と記されているように，キリスト教信仰の核には死者の復活という超自然現象があるからだ。

非理性的な要素は，外部の世界にだけ見えるのではない。メーソンは自己の理性こそ彼の本性を表すものと思いながらも，もう一つの非理性的な内なる自己の存在に既に気付いてはいた。オックスフォード大学 Bodleian 図書館で古代の秘技を研究した時のことだ。彼は，突然，本棚の列の「いたる所に（存在が感じられる）霊が待ち伏せして (559)」いるように感じ，恐怖の中，コウモリに過ぎないと科学的に自分を納得させようとしている内に，自分に内在するもう一つの自分に気付くのだ。

'Twas as if this Metropolis of British Reason had been abandon' d to the Occupancy of all that Reason would deny. Malevolent shapes flowing in the Streets. Lanthorns spontaneously going out. Men roaring, as if chang'd to Beasts in the Dark. A Carnival of Fear. Shall I admit it? I thrilled. I felt that if I ran fast enough, I could gain altitude, and fly....I could smash ev'ry Window in a Street. Make a Druidick Bonfire of the Bodleian. At some point, however, without Human prey, the Evil Appetite must fail, and I became merely Melancholy again. (559-60)

上述の描写には，メーソンの理性が抑圧してきた人間の影の要素，すなわち非合理的な考えや邪悪な原始的本能が解き放たれ，理性をも食いつくす程になっている様子が窺える。メーソンの状況はユング的深層心理学の観点から見ると，心の中の対照的な二要素である，意識下の知的，合理的思考と無意識下の感情的，本能的，非合理的思考の葛藤と解釈することも可能だ。通常，後者は西欧社会の規範で無価値なもの，あるいはタブーとされて無意識の領域奥深くに押し込められている。神経症や分裂症は，無意識下に抑圧されていた非合理的要素が破壊的な形で自我の統制から反乱を起こした時の症状なのである。このような病的な状態に至らない場合，後者の力は，外部のスクリーンに自己を投影することで心のバランスを保とうとする。魔術的な世界像は，実際の外部の現実ではなく，心的現実が外部に投影したものと考えられるのだ。その意味で，図書館にうごめく霊も，後に現れることになるレベッカの亡霊も，彼が抑圧している非合理的要素が下界のスクリーンに投影されたものと解釈することもできるのである。このような場合，ユングによると「個性化過程」という段階を通して，無意識の領域にある諸々の影の要素に意識は耳を傾け，両者の調和と統合を果たす必要があるという。ユングは曼陀羅図に見られる秩序，全体性，均衡がこの統合を表現する人類の元型と考えたが，「個性化過程」を経ると，分離されていた二つの両極的意識は一段と高い次元で統合され，深化した意識，あるいは拡大した意識が獲得されるのである。この時，自身にとって否定的な側面やこれまで活用されなかった側面を経験し，身代わりに外部に投じていた投影を撤回するようになる。そしてより大きな寛大さや思いやり，人間的感情を示せるようになる。しかし，そこに到達するまでの「個性化過程」では，無意識下に抑圧されていた要素との葛藤が生じ，人は不安定，よるべなさ，見当識障害という苦悩に満ちた状態

に陥ると言われる。メーソンが患うメランコリーはこうした不安定な精神状態を表していると解釈できるのだ。[17]

このようなユングの深層心理学的解釈を離れて，メーソンの晩年の暗い精神世界を眺めると，そこに西欧近代の人間が辿る宿命を見いだすことができる。彼のメランコリー症状の進行は，人間の邪悪な心が生み出した残酷な現実世界に対する厭世観が原因すると同時に，理性の限界を知った者が陥る虚無感が起因していると考えられる。彼がこれまで旅してきた世界は，すべて非人間的な奴隷制で蹂躙されていた。楽園と思われていた新大陸は，西欧列強の進入と同時に利権によって食い荒らされ，みんなの「絶望 (345)」の土地に変わってしまった。彼自身，アメリカの植民地境界線の測量によって，権力の暗い面に加担してしまった。理性に対する近代西欧の信仰は，古い権威や信仰から人間を解放して，進歩と自由を創造する理想的社会を生むと信じられていた。しかし，現実に作り出されたのは，こうした無惨な世界だったのである。死の5年前の1781年，天王星が発見され，知の世界の拡大に対して科学者たちが無心に喜んでいる時ですら，理性とは程遠い人の心に潜む残虐性を思うメーソンは厭世観から抜け出せないでいる。彼にとって望遠鏡の先にある星はただ「光を放つ幽霊の行列 (769)」で，その存在目的を人間の知で明かすことができない。「人々の自我の悪臭を放つ洞穴には，理性が真実と見なすすべてを否定する意識があるのかもしれない……賢くもなく，精神的に未発達で，親切心も示せず，冷酷無情なまでに残酷な存在が隠れて付きまとい，待ちかまえている。」また，晩年に繰り返し見続けた「夜の都会の夢 (749)」の奇怪な風景も，夢とも現とも判らぬ形の中で，近代が抱える問題を象徴的に表している。そこに林立するストーンヘンジの石碑には何の碑文もなく，意図も不明である。神秘の存在を表す亡き妻の姿も見えず，敵と見方の区別も判らない「同じ暗闇のアナーキー」，「カオスの都会」は，まさに混迷するメーソンの心象風景となっている。近代の産業資本主義の技術的成長が起因する急激な社会変化や，合理主義に基づく伝統からの解放は，不確実な感覚，方向の喪失，個人の寄る辺なさというアノミーな世界をもたらし，それは都会に集中的に現れたと言われる。またマックス・ウェーバーの言う科学がもたらす世界の脱魔術化は，魔術や神秘のみならず，権威やアイデンティティすら追放して，社会を断片化してしまった。メーソンの夢はこうした近代の経験を先取りする形で表していると考えられるのである。作品最後で，死も間近のメーソンの病床を見舞ったベンジャミン・フランクリンに，彼は大陸規模の「巨大な一つの機械」が作られつつあることを語っている。それはアメリカをやがて征服する産業主義を指しているのであり，インディアンの魔法も，手の中に飛び込む魚のいる大自然も消滅した暗い未来の姿なのだ。

メーソンは理性の限界を知り，また非理性の存在を自己の内と外に認めながらも，理性を偏重して生きる以外の生き方はできなかった。それは金星通過観測と境界線測量の両方で行動を共にしたディクソンと，不仲になったことに象徴的に示されている。二人は体制側の非人間的制度に反発する点では双生児的反応を示してはいる。しかし，「一つの惑星の明るい面と暗い面 (757)」と牧師が称するように，本質的には二人は，対照的な性格をもち，対照的な生き方をしてきた。ディクソンは，太って陽気な躁病体質で，素朴な田舎者として社会規範に縛られることなく自由に行動をすることができ，また非合理的な魔法や超自然的な事柄を受け入れるていた。他方，メーソンは痩せてメランコリーに病む都会人であり，社会の義務に縛られて無謀な行動がとれない傍観者であり，また科学者として合

理的な世界に身を捧げてきたのである。牧師はこの二人に対して「8年間のトラバースの終わりにメーソンとディクソンは，二人の間の危険な境界を越えることはできなかった(689)」と結論している。

結　論

以上のように，牧師の語りを通して浮かび出てきたのは，これまで歴史の表舞台には隠れていた周縁者・弱者から眺められた別の歴史像であり，西欧近代の社会制度や理性・合理性偏重の原理の欠陥であり，植民地において広義の意味での帝国主義政策が取られていた18世紀という時代に生きた人々に潜む問題点であった。それはまた，反西欧中心主義，反理性中心主義，反人間中心主義の視座，すなわちポストモダニズム，あるいはポストコロニアリズムの視点から眺めたモダニズムやコロニアリズム批判とも解釈できる。牧師にとっては，語り，歴史を見直すことは，ディクソンが「行動する」ことを通して奴隷制に反対したのと同様，権力に対する自らの意志表示の行為となっている。自らの話しは，聞き手の記憶に残ることで「忘却という強風(747)」に吹き消されることを免れるだけでなく，親族の間で語り継がれることで，語りの輪が広げられていく。また「何世代にもわたる家庭内の校訂という過酷な鍛造工場で情け容赦なく鍛練されること (695)」で，誇張した部分や，個人的な好みに左右されない純粋な真実にまで高められていくことにもなるからだ。牧師はそうしたことを信じているから，メーソンたちと体験を共にし，同じ歴史をみつめ続けた者として，「お互いにいかに夢を見，また誤解をしてきたか (696)」ということを含めた人間的真実を伝えるために，事実だけに拘らず，推測や想像したことまで語りの中に加えている。語りに見られる虚構的要素は，他方では，歴史が権力者の「卑しいと必ずや判明する利益 (350)」に利用され，信頼性を無くすことを避け，なおかつ面白い話しとして人々の記憶に残るための戦略でもあるのだ。彼の話しには，LeSpark 家の者が読んでいる当時のポルノ小説の登場人物まで紛れ込んでくる始末である。しかし読者にとっては，こうした事実と虚構，歴史と空想が混じった話しを読み，様々な解釈を与えることは，丁度，何世代もの人々の校訂と同じ過程を経ていることになる。このようにピンチョンが新たに描いた西欧近代に見られる二項対立の構図では，読者が楽しみながら解釈し，純粋な真実に到達すると同時に，行動を起こす原動力にもなるように仕組まれているのだ。ただし，読者が実際に仕組まれた通りに反応するか，否かは別問題である。

また体制と反体制理念の対立に関しては，これまでの作品と同様に，最後に両者の交流の必要性が暗示されている。それは対立概念を具現する二人の主人公，メーソンとディクソンの前に作品冒頭に登場した 'The Learnèd English Dog' が15～6年前と変わらぬ姿で再登場し，二人のそれぞれの夢の中に同時に現れると「この次，二人が一緒の時に私も一緒だ (757)」と告げていることに示されている。その言葉が暗示するように，この犬は超自然的 (preternatural) 存在であると同時に，接頭語の 'preter' が意味する 'preterite' な存在，すなわち「見捨てられた」もの，弱者でもある。弱者である犬は強者・人間に殺されずに生き残っていくための英知を身に付ける過程で，禅宗の公案が教える諸々の対立概念が統一された高次の英知も身に付けて(learned)いた。その意味で，犬は対立概念の双方の属性を兼ね備えた対立の仲介者の役もしていると考えられる。反体制の「他者」としての視点は，既存の社会の妥当性に疑問を投げかけ，再検討を促し，地殻変動を起こす力として，また理性ばかりに支配されて歪んだ精神にバランスを取り戻させる力として重要な役割を

担っている。両者は本来，敵対しあうのではなく，交流し合う時に建設的な創造がもたらされる，とこの神秘的な犬が暗示しているように思えるのだ。

（なお本論の一部は，日本英文学会第71回大会での口頭発表「*Mason & Dixon*—植民地帝国主義時代におけるカウンターフォース」の論と重複する。）

（注釈）

1）「帝国主義」とは，政治的，経済的，軍事的，文化的な権力・権威をもってする他民族の領土や国家への侵略と支配という一般的な広義の意味を指し，いわゆる狭義の意味で使われる19世紀から第二次大戦までの時代に見られた政策とは異なる。

2）Thomas Pynchon, *Mason & Dixon*, (N.Y. : Henry Holt and Co., Inc., 1997), 347.

3）この頃のアメリカの歴史についてはメアリー・ベス・ノートン『アメリカの歴史（Ⅰ）新世界の挑戦』（三省堂，1996）を参照。

4）J.R.グリーン，『イギリス国民の歴史（完）』，（篠崎書林，1987），377.

5）Anthony Giddens, *The Consequences of Modernity*, (Polity Press, 1990), 59.

6）*Gravity's Rainbow* では，アルゼンチンの平原パンパに政府の手が加えられ，大自然が都市ブエノスアイレスへ変貌する過程が描かれているが，同じことがアメリカでも起きているのである。

7）ラインは権力者側の制御機能をはたすから，作者にとっては負の作用しか考えられない。だが一般的には，植民地間の地域紛争を解決した点において高く評価されている。メーソンとディクソンのフィールド・ジャーナルのオリジナルを本として出版したA.Hughlett Masonは，序文で，ペンシルバニアとメリーランドの境界線紛争の複雑な原因をあげ，二人の測量技術の正確さが長年の難問を解決したと指摘している。これほど紛争が長期に及んだのは，英国王室の側に他の者に既に授与した領土権を，別の者にも授与するという不注意な慣行があったこと，歴代の国王は科学的な事柄に無能でありながら，有能な科学者の助言を求めなかったこと，当時，正確な地図が作成されていなかったこと，詳述するのが不可能な境界があったこと等々，様々な原因があげられている。(ed. A Hughlett Mason, *The Journal of Charles Mason and Jeremiah Dixon*, American Philosophical Society, 1969)

8）Thomas Pynchon, "Nearer, My Couch, to Thee",(*The New York Times Book Review*, 6 June 1993)

9）Thomas Pynchon, "A Journey Into The Mind of Watts",(*The New York Times Magazine, 12* June 1966), 35.

10）瓶の中から起き上がったJenkinの耳は，語りかけられた人々の言葉の全てを吸収するが，何も明らかにしないことで，理神論の興隆を促した当時の精神的土壌を暗示している。それと同時に，この耳が貢献した事柄は，資本主義企業の飽くなき利潤追求の精神をも示している。切り取られた耳は庶民院でスペイン批判の火付け役として利用され，これが原因となってイギリスの資本家層は，スペイン領アメリカとの交易でスペインの制限に対して抱いていた不満を爆発させ，対スペイン戦争へとイギリスを突入させた。この耳は，さらにミュージアムに陳列されて，新たなる金儲けの道具とされている。

11）Thomas Pynchon, "Is it O.K. to Be a Luddite?", (The New York Times Book Review, 28 Octorber 1984), 40.

12）キース・トマス，『宗教と魔術の衰退』，（法政大学出版局，1993），983

13）Bronislaw Malinowski, "Magic, Science and Religion", 『宗教と魔術の衰退』, 954.

14) 客観的意識と主観的意識が微妙に相互作用する人間の精神機能については，エドガール・モラン，『失われた範列』, (法政大学出版局, 1992) の論を参考にした。

15) 客観的理性が価値なしとして否定したものを救いだし，新しい創造へと繋げるのは主観的意識である。"A Journey Into The Mind of Watts"の中で，ピンチョンはロスアンジェルススラム街WattsにあるWatts Towersに特別な意義を与えているが，その理由は人の夢という主観的意識が，廃棄物として捨てられたがらくた類から素晴らしい創造をなしたとう，その象徴的意味にあるのだ。Watts Towersは割れたガラスや瀬戸物，釘，ブリキ缶やあらゆる種類のくずを集めて創られたものである。しかし，それらは　きらめくモザイクとなって見事に変身し，芸術品となったのである。

16) Northrop Frye, *Anatomy of Criticism*, (Princeton : Princeton Univ. Press, 1957), 186

17) ユングの深層心理学的分析と曼陀羅に関する理論は，C.G.ユング著『無意識の心理学』（人文書院1982），及びルッツ・ミュラー著『魔術――深層意識の操作』（青土社1996)を参考にした。

Mason & Dixon——Dichotomic Patterns in The Old Colonial Days

Kyoko MURAKAMI

(Received October 15, 1999)

ABSTRACT

In Thomas Pynchon's latest novel, *Mason & Dixon*(1997), he follows his previous patterns of dichotomic elements peculiar to Western modern culture. We can see the interrelationship of the two elements most clearly in the conflict of 'They' system and the Counterforce in *Gravity's Rainbow,* which is fundamentally almost the same in *Mason & Dixon.* In the novel, what 'They' system represents is seen in the colonial empires of Western world Powers and capitalist enterprises whose sole concern is to pursue profits. They try to control people through inhuman slavery system, as well as by the establishment of invisible governing system, 'Line'. Their emphasis on reason and rationality is reflected in the 18th century's dominating spirit. The latter 'Counterforce' elements are found not only in various groups who struggle to preserve their own freedom against the power and order of the Establishment, but also in the magical realism which appears quite frequently in the forms of magics, mysteries, miracles and supernatural forces. This irrational and unreasonable element is related to human subjective consciousness, while rational and reasonable element, that is, the principle of the Establishment is connected with human objective consciousness. In the sense that both subjective and objective thought belong to human consciousness, they are inseparable. Even if the irrational element is generally regarded as worthless in society, it is important as the origin of human creativity, originality and transcendentness. I would like to discuss the patterns of dichotomic elements and their interrelationship in this paper.

KEY WORD

dichotomy, reason, slavery, line, unreason, magical realism, creativity